

—物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

我が国も例外なく、世界的な未曾有といわれるほどの不況に見舞われて混沌としている。

その結果として、リストラや派遣切りによる失業となり、次世代を担う若者達の就職難へとつながっている。国家財政も破綻されかねず、第二のギリシャにならないとも限らないといわれている。

ピーター・F・ドラッカーはモダン（近代合理主義）からポストモダン（超近代合理主義）へと「物の見方、考え方」を軌道修正する時代になったと述べている。それは、著じるしく変化する「高度情報技術化社会」では哲学、政治、社会、科学、経済を含む社会環境が日進月歩から秒進分歩へと変化している21世紀に対し対応できなくなったという考え方である。

そこで、如何に対応すべきかということで先哲の教えを学び、対処する英智を考へることにする。

仏教でいう人間社会は「娑婆」であり忍土、忍界であり妥協と忍耐と我慢が必要な社会である。

そこで「転迷開悟」で現実を知り学び、「仙厓和尚の禅機図」で円相→輪→和の考え方を学び、「聖徳太子の17条の憲法」で、人の上に立つ人々の心得を学び、我れ我れ国民が国民として、何を考へ何を実践すべきかを考へてみたいと思う。

企業経営も同様で、断片的なメディアの情報に右往左往しない情報の分析、活用をはかる人間力を養う努力が必要だと思われる。

特に「独断専行」ではなく、広く英智を求め常に向上のための挑戦と努力をしたいものである。これからは「和」と「習合思想」の考え方が重要で、異論も認め排除でなく妥協も必要であると考え以下述べる。

著者：広島大学生物生産学部講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
釋 禳 禪（野風生）
雅号 樹泉

2. 転迷開悟を学ぶ

我れ我れ人間の住む世界、いわゆる人間社会のことを仏教の世界では「娑婆」といい、忍土、忍界と訳され、苦るしみが多く、忍耐すべき世界とされている。人間が現実に住んでいるこの世界を釈迦牟尼仏、お釈迦さんが教え導いてくれることを「転迷開悟」といい、「迷いを転じて悟りを開く、真智を開き真理を知り悟ること、即ち煩悩を断ち仏教の理想たる涅槃を証得すること」をさしている。

この「娑婆」の世界で企業活動も個人活動も、政治活動もいろんな制約をうける。

お釈迦さんは、この「娑婆」について「世の中のことをあるがままに知ることは難しい、それは虚仮の世界であり、実かと見れば実でなく、偽りかと見れば偽りでもない。愚者たちはこの世の中のことを知ることはむずかしい」と述べられている。

だから、企業活動において「三方良し」の考え方を実践することを述べ、結果として近江商人の経営に生かされている。

それは「相手（顧客）にとっても良く」、「自分（企業）にとっても良く」、「世の中にとっても良い」ということである。

先の政治の世界のできごとは、この「三方良し」とはかけ離れた結論となってしまったが、これはまさにお釈迦さんのいう「虚仮の世界」の問題である。

では、如何にしてこれを解決すべきかを考えた場合に各々の当事者が「他思故有我」、いわゆる「相手の立場を思い考える」ことであり、

自我を捨てさり、現実を真剣に考え見なおし妥協することだと思考する。

その為には、1) 何故軍事基地が必要なのか、2) 何故沖縄なのか、3) 60年前と現在の国際情勢と軍事力の進歩変化による見直しは必要ではないのか等々…情報を開示して「転迷開悟」、いわゆる「転開」が必要であると思考する。

特に軍事情勢は時々刻々と変化するので「朝令暮改」は大いに結構である。

一般に「命令や方針がたえず改められてあてにならないこと」で「朝改暮変」ともいわれるが、「臨機応変」、「見機而変」の対応をとるべきであり、現在の「高度情報技術化社会」にあっては、対応の遅くれが企業活動にあっては致命傷となる時代である。

時代の変化と将来の予想を常に思い考え行動することが重要である。「人」、「物」、「金」に「情報」と「時間」が加えられた時代の変化を知ることである。